



独房でブザーが鳴った。

彼は目を覚ました。毎日の疲労を回復できる時間が許されていない。疲れ切った体を無理矢理に起こし、ベッドに腰掛けてしばらくじっとしていた。何か夢を見ていたような気もしたが、何の夢だか思い出せない。そして目を覚ませばやはりそこはもう見慣れたただの独房でしかなかったのだ。

その独房は一辺がおよそ4 mほどの立方体で、周囲は全てむき出しの鉄板で囲まれ、天井には一つ、裸電球が点っていた。それは網目状の鉄枠で保護されていたが、たった一つの貴重なその光源を破壊しようとする者もいるのだろうか。壁も天井も塗装もしていないからそこかしこ隅の方には錆が浮いている。独房の隅にはシャワーと便器がむき出しで設置されていて、その真下には排水溝が口を開けていた。そのただずまいは、確かに独房というに相応しいものだった。

しかし時折彼にはその独房がなじみ深いものに思われる時があった。何故なのだろう。記憶の断片の中で確かに知っている気がするときがあるのだ。

けれども彼は最近そのことについては考えないようにしていた。考え出すと決まってひどい頭痛に襲われるからだ。それから彼はベッドを軋ませて起きあがると一方の壁に近寄った。そこが独房への扉になっているのだが、周囲の壁と同じように鋼鉄製の分厚いシャッターになっているので、鉄格子のように独房の外を見ることも囚人同士で話をすることもできない。

扉の下の方には小さな扉が付いていた。彼はその扉を開けて手を入れると外を探った。そこにはいつもと同じ、朝食を乗せたトレイがあった。彼はそれを独房の中に引き入れると、再びベッドに腰を掛けて、簡素な朝食を食べ始めた。固いパンと冷えきったスープ。味などわからない。元から味のことなど考えられてはいないのだろう。

これは餌だ。彼ら囚人たちが、労働に際して消耗する体力を補充するためのエネルギー源に過ぎない。とにかく食わねば体が持たないと頭では理解しているから、食欲などは無関係であった。がちがちのパンを前歯で無理にかみ切っては、唾も出ないからその代わりにあまりにも薄くて水も同然のスープで喉に流し込んだ。

朝食が終わると彼は薄汚れたグレーの作業服に着がえた。左腕には白い腕章が巻かれており、そこには256と数字が描きこまれている。多分囚人を識別する番号なのだろう。だとすればここには少なくとも256人以上の囚人がいるわけだ。それから素足に鉄板入りの頑丈な作業靴を履いた。

靴のサイズまでは考えられてはいなかったらしく、彼には少し小さすぎたから、最初は足に豆ができたり、皮膚が擦れたりしてひどく痛かったものだが、今ではそれにも慣れてしまっている。足の皮の方が靴に馴染んでしまったのだ。

次にベッドの角に掛けてあったガスマスクを装着した。革製で両眼が離れたガラスのゴーグルになっていて、鼻と口は同時に隠れるように作られて、頑丈そうなフィルターが両側に張り出して付いている。工場内ではこのフィルター越しに呼吸をしなければならない。これも彼は慣れない内はうっとうしくて堪らなかった。まるで、水中で呼吸しているような気がするのだ。

まだ工場に来て日が浅く、彼に反抗心が残っていた頃、彼はよくふいにそのガスマスクをかなぐり捨てたい衝動にかられたものだ。今では、彼はそれが顔に密着しているかを入念に確かめる。彼はまだ死にたくはなかったのである。それから作業着と一体化しているフードを頭からかぶり、最後に分厚い軍手を手にはめた。

やがて始業のサイレンが鳴り出すと、独房のシャッターが軋みながら横にスライドし始めた。時間が来ると自動的に開閉するようになっているのだ。シャッターが開ききると彼は通路に出た。食べ終えた朝食の食器を足下に置いておく。

通路の両側には彼のそれと同じような独房がいくつも並んでおり、一斉に開いたシャッターから囚人たちがぞろぞろと出てきた。皆一様に同じ作業服とガスマスクを身につけていた。やがて彼らは疲れた足取りで通路に列を作り始めた。彼もその中に加わり、囚人たちはのろのろと通路を進み始めた。

その通路も周囲は全て鉄板で作られており、その中を進む囚人たちは、ガスマスクのせいで、通風口を這っていく羽をもがれた蠅のように見えた。鋼鉄の床に彼らの作業靴の音が反響した。不思議にも彼らの歩みはいつでもいつの間にか一致するのだ。最初はばらばらなその足音は、やがて同じリズムでガコンガコンと音が揃う。

そのまま進むとやがて通路は二手に分かれていた。それぞれの頭上にはAタラップとBタラップという標示板がぶらさがっており、彼はAタラップに進んだ。Bタラップに進む囚人も多い。全体の三分の一ほどはいたろうか。しかし彼に与えられたマニュアルでは彼の行くべき通路はAタラップと決められていて、Bタラップがどこに通じているのかさえ説明されてはいなかった。

それから彼は同じようにしか見えない通路を歩き、いくつかの階段を下った。そしてしばらく進むと、そこにはいきなり巨大な空間が開けていた。それが工場を中心部であり、彼の作業場であった。

工場はかなりの広さがあり、その作業場は中型の船舶ならば楽に収容できるのではないかとと思われるほどだった。片側にはいくつもの大小のタンクが据え付けてあり、なにやら様々な補機類や太さの異なる何十本ものパイプが複雑に配管されていて、そこかしこにそれら进行操作するための制御盤やバルブ類が設置してあった。

見上げると工場の天井は20mほどの高さがあり、はるか上部にはこの工場の工程を管理しているのであろう管理室の窓が見えた。ガスマスクの着用といいこれから始まる作業の内容といい工場が毒ガス工場であることは容易に想像できた。

そうしてそれら機械類が設置されている作業場の反対側は貨物列車発着のためのプラットホームになっていて、そこだけは外部に向かって開放されていた。そこからは暗い針葉樹の森が見えたが、大抵は深い霧に包まれていてほとんど視界はきかなかった。しかし彼がここに来て工場の外界を眺めることができるのはそのプラットホームしかなかったから、彼は作業をしながらよくその森の木立に眺め入った。

工場のすぐ近くまでせまったその針葉樹の木々は、多分杉の木か何かだろう。霧の中から深い緑色の枝をのぞかせており、それは彼がこの工場で唯一見ることができる自然であった。せめて小鳥でも見えたらいい、と彼は思った。そうすれば幾分か彼ら囚人たちの心の慰めにもなるかかというものだ。しかし、彼はそこに針葉樹の木立以外に生き物を見たことがなかった。それが天候や環境のせいなのか、この工場で生産されるガスのためなのか、彼にはわからなかった。

一度だけ、彼がこの工場に来た最初のころころ、彼はそのプラットホームから飛び降りて森の中を逃亡する自分を空想したことがある。ホームから線路の敷設してある地面までは2m足らずだ。飛び降りられないことはない。その先には特にフェンスも見えないようだ。そして森の中に逃げ込んでしまえば、年中のこの霧である。そう簡単には追っ手からも見つかるまい。

だが、毎日の労働で疲れ切った体でこの森を越えることができるのだろうか。そもそもこの森はどこまで続いていて、その先には何があるのだろうか。犬がいるだろうか。追っ手は犬を放つのではないか。軍用犬であれば、これらの木立も邪魔にはなるまいし、犬は鼻で彼を嗅ぎつける。彼らはいったん獲物を見つければ容赦なく襲いかかってくるだろう。追っ手に捕まるよりもひどいことになりそうな気がした。

運良く逃げおおせたとしても、その先はどうするのか、彼は工場がその国のどこにあるのかさえ知らなかった。結局空想は空想でしかなかったのである。

作業場には既に看守たちが配置についていた。腰だめに軽機関銃を構えている。彼ら囚人たちがそれぞれの持ち場についてほどなくすると、やがて工場に貨物列車が到着する。その貨物列車は毎日朝決まった時間に必ず工場にやってくるのだ。

最初遠くに警笛が聞こえ、それが針葉樹の森に木霊する。それから次第に線路が振動し始める。車輪が線路のつなぎ目を越す音が聞こえ、そのリズムはやがてゆっくりしたものになり出し、それは列車が減速中であることを示していた。

プラットフォームの回転灯が赤い光をつけて回りだし、間欠的なサイレンが列車の接岸を予告する。霧の中からはぼんやりとフォグランプの明かりが見えたかと思うと、出し抜けにそこからディーゼル機関車が無骨な鼻先を現した。自動制御された無人機関車である。列車はさらに減速を続け、最徐行した後プラットフォームに停止した。

そこから先が彼ら囚人たちの仕事だった。機関車の後ろには8両の平台の貨車が連結されており、一両につき四つの大きな鉄製の球体が載っていた。その球体は直径が3 mほどはあったろうか、帆布製のキャンバスと一体となったチェーンで貨車に固定されていた。

囚人は全部で百人あまりいたが、数人ずつがグループとなり、それぞれのグループには一人ずつ看守がついていた。囚人たちはチェーンと覆いをはずしてしまうと、注意深くその鉄球を貨車から下ろした。かなりの重量があった。

貨車の荷台には鉄球が転がり出さないように浅く窪みが作ってあったので、まずそこから鉄球を押し出すだけでも相当な力が必要だった。数人が貨車の反対側に回って、その鉄球を満身の力を込めて押した。プラットフォームの側にも数人の囚人が鉄球に手をつき、転がり過ぎないように力加減をした。それから荷台とホームとの間隙を越すときにも同様の注意が必要だった。ホームと荷台は同じ高さにぴたりと合うように設計されていたが、それでもその間には数センチの間隙があって、うまく転がさないと鉄球はその隙間にはまってしまう。そうすると荷台の窪みからはずすよりも力があるのだ。

ある程度弾みをつけて転がす必要があった。それを越してしまえば作業上の鋼鉄の床は滑らかだった。彼らはその鈍く光る鉄球を工場の所定の場所まで転がしていった。そこには貨車のそれと同じような円形の窪みがあり、鉄球は慎重にそこに据えられた。

鉄球にはちょうど正反対の位置に赤と青の二つの気密栓が付いており、その機密栓が水平に、所定の位置に来るようにしなければならない。それは案外難しい作業で、何度か鉄球を転がし直して据え直すこともあった。どうにか所定のほどよい位置に鉄球が据えられると、その機密栓には同色に色分けされたホースが取り付けられ、取り付け口のバルブがロックされる。

それが済むと囚人の一人が手を上げた。するとそれを合図に別の囚人が配管のバルブを開き、制御盤の操作が始まった。工場内の機械がうなりをあげ始め、圧搾空気の音が聞こえた。

彼は目の前の計器に集中した。針がじりじりと左に振れ始め、30分ほどで赤のゾーンに入る。すると彼は右手を挙げて他の囚人に合図を送った。鉄球内の気圧が限界まで下がったのだ。彼の合図で今度は鉄球内にガスの注入が始まった。再び彼は計器に注意した。今度は針は右に振れ始め、赤から緑、そして青のゾーンに入る。今度は鉄球にはその気圧の限界までガスが注入されたのだ。また彼の合図で、機械の動作が止まった。バルブから配管が外された。

こうして内容物を詰め替えた鉄球は貨車の元の場所に戻され、また次の鉄球が運び込まれていくのだった。作業場の鉄球の設置場所は5機あったが、鉄球は一つの列車に三十個乗っていたから、その全ての作業を終わらすのはちょうど一日がかりの仕事となった。

全作業はこのようにして毎日朝から始まって夜遅くに終わった。そうして全ての鉄球が積み込まれると、最後に列車に隠れてこの工場の脱出を図る囚人がいないかどうか、看守たちが列車の各部を入念に点検した。それから列車は再び警笛を鳴らして工場を出発し、囚人たちは看守たちに監視されながら自分の独房に戻っていくのだった。

彼に思い出せる最後の記憶はフード付きの作業服を着て列車に乗せられ、顔にはガスマスクが装着させられていたことであった。彼の国とこの国は交戦状態にあった。彼は敵国の捕虜となり、このガス工場に送られて来たのだ。

彼が漠然と理解しているのはそれだけであり、過去の記憶はは全て朦朧としていて具体的な事実は何も思い出せなかった。それらは時に感じる独房に対する奇妙な懐かしさと同様に、思い出そうとすると決まって、吐き気を伴うひどい頭痛に見舞われるのだった。

ひょっとすると工場の生産している毒ガスが微量に体内に吸収されており、その副作用なのかもしれない、あるいは捕まった時に敵に洗脳されてしまったのか、それとも彼は無意識のうちに自分の過去の記憶を拒否しているのだろうか。

独房に帰ってから彼ははっきりとしている彼の最後の記憶、彼がこの工場に来た最初の日のことを思い出していた。

彼を乗せた列車がこの工場に到着しそのゲートが開いた時、彼を待っていたのは敵国の一人の看守だったが、その格好は彼と全く同じ作業服とマスク姿であり、違うのは肩にかけられた機関銃と左腕の腕章の黄色のタブだけだった。

その看守は無言で彼を手招きすると独房の一つに連れていき、くたびれたベッドの上に置いてあるかなり読み込まれたらしい一冊の本を指さした。その看守の仕事はそれで終わったらしく、きびすを返すとそのまま帰って行った。

彼はその本を手を取った。表にはマニュアルとのみ書かれている。

彼のすべき作業と守るべき規則は全てそこに記されていた。例えば作業の章には、朝彼が独房を出てから進むべき通路や作業場での配置場所、列車が到着した時の鉄球の下ろし方からその後の手順、最後に再度その鉄球を列車に載せる際の注意に至るまで、詳細に説明されていたが、逆に言えば彼に関わりの無いことについては全く言及されてはいなかった。

また規則の章には、起床、始業、終業の各時間や食事が朝晩二回だけであること等が記されている他、特に重要事項として、囚人は独房以外の場所では絶対に作業服とガスマスクを着用すること、囚人は工場内の誰とも、会話は勿論、相手が同じ囚人だろうと、敵国の者だろうと、お互いにいかなる意志の疎通もしてはならないことが記されていた。

実際彼がここに来て既に数カ月が経とうとしていたが、その間彼は誰とも口をきいたことがなかった。もっともこのガスマスクをしていては他人との会話は不可能であったし、ゴーグルまで一体化したそのガスマスクでは会話はおろか相手の表情すら窺いしれなかった。

さらに言えば敵国の看守を含めて工場内の者は全て同じ作業服とガスマスクを着用していたのであり、そもそも各個人の識別は不可能だったのである。唯一左腕の腕章の数字が彼らの相違点だった。またタブの色だけが、彼ら囚人と敵国人では違っていた。

肉体的な疲労は別としても、最初彼はこの誰とも会話できないという状況にひどい苦痛を感じたものだ。誰とでもいい。とにかく誰かと話をしたくて堪らなかった。無理と分かっているでも独房で他の囚人に聞こえないかと声を上げたり、鉄板の壁を叩いてみたりした。わざと作業の手順を忘れたふりをして看守に手真似で教えを請うたりもしてみたが、看守は何の反応も示さず、その機関銃の先で彼に作業に戻るよう促しただけだった。

なにもかもが無駄だった。ふいにガスマスクをかなぐり捨てたいという欲求と同様、今では彼はそうした試みは放棄していた。それは罨にかかったネズミが騒いだようなものだった。習慣となってしまったのだろうか。彼はもう誰とも話そうとはしなくなっていた。



また、時々彼は自分が何をしているのかを考えた。彼は工場の大半の設備が何のためにあるのかを知らなかった。そもそもその工場が何を生産しているのかさえ公式な意味では彼は何も知らなかったのである。

マニュアルには彼のすべき作業だけが記載されており、その他の工程や工場そのものについての説明は一切記載されていなかったのだ。おそらくは他の囚人たちに配布されているマニュアルもそうなのだろう。そこにはその囚人がすべき作業に関することのみが記載されていて、他の囚人の関わることには触れてはいないのだ。

彼はただ、工場内の者全員がガスマスクを着用していること、またその工場の作業場の施設が、配管とバルブだらけでいかにも化学工場然としていることからある種の毒ガスを製造しており、おそらくそれは彼の祖国に対して使用されているのだろうと想像しているだけであった。

自分は作業を拒否すべきなのだろうか、最初の頃彼はよく自問した。彼は自分の意志ではないとはいえ、結果的には自国に対する攻撃に加担していることになるのではないかと。だから本当ならば工場の作業につくことは拒否すべきなのだろう。

しかしマニュアルには当然のことながら作業の怠業罷業その他妨害行為は厳しく罰せられるであろうことが明記されていたし、実際時には貨物列車に乗ってこの工場を去って行く者を見かけたこともあった。腕章のタブをはずしてあったので誰だったのかはわからなかった。あるいは敵国の者だったのかもしれない。しかしそれは工場に反抗して規則を破り、他の収容所に送られた囚人だったのではないだろうか。

そして何らかの処罰を受けたに違いない。最悪の場合処刑されたということも考えられる。

またマニュアルには勤勉に仕事をした者にはそれなりの報償が与えられるであろうことも記載されていたが、その報償がどのようなものであるのかは彼にはわからなかった。

彼の見限り他の囚人たちは彼と同様疲労しきってはいるものの、それなりに仕事をしているようだった。少なくとも反抗的な態度を取ったり故意に作業を遅らせているような囚人は見たことがない。

それどころか、むしろ積極的に働いて見える囚人もたまに見ることがあった。もっとも各個人の識別ができない状況の中では、それが誰なのか、作業が終わってしまえばもうわかりはしなかったのではあるが。そして結局結論の出ないままに彼も働かざるを得なかった。

労働は過酷なものだったので彼は日に日にやつれてきた。数カ月も経つとやがて彼は疲れ果て、その日一日一日を乗り越えるのがやっとのことであり、もう反抗などどうでもよくなってきている自分に気がついていた。

ある日の夕方、彼がいつものようにその日一日の労働を終えて独房への通路を歩いていると、一人の看守が彼の前に立ちはだかった。看守は身振りで彼について来るように命じた。処罰されるのだろうか。何か不始末をしてしまったのだろうか。

確かに彼は勤勉とはいえなかった。仕方なしに作業に携わっているだけであった。しかしそれは他の囚人たちも同じ事であったろうし、特に彼だけが目立って怠けて見えたとも思えない。彼は不安に襲われながらその看守の後について行った。すると看守は彼が独房と作業上を往復するいつもの通路とは違う階段を上った。そこは彼の独房の一階上の通路に当たるはずだった。

その通路にも両側には独房が並んでおり、彼はその一つに通された。そこは一見して前の独房と同じだった。ただ違うのは、ベッドの上に一丁の軽機関銃と黄色のタブが置かれていることであり、そしてまたマニュアルがあった。

彼はマニュアルを開いた。規則の章は前のマニュアルと同じ内容であり、規則に違反すれば処罰されること、勤勉に働けばそれなりの報償が得られることが書かれており、やはり工場での意志の疎通は厳禁とされていた。

作業の章を読むと、驚いたことに今度の彼のすべきことは看守の仕事だった。敵国の看守たちに混じって彼は同国人を監視することになったのだ。これは昇進なのだろうか。これがマニュアルに記された報償ということなのだろうか。

彼はただ惰性に任せてのろのろと仕事をこなしていただけなのに。もっと積極的に働いていた囚人は他にもいたはずだったのに。皮肉なものだと彼は思った。

それから今度の独房には鏡とカミソリがあったので、彼は何ヶ月ぶりかで自分の髭を剃った。鏡に映すと、ここ数ヶ月で彼の頬はだいぶ痩けているようだった。視線がどんよりと曇って目に覇気がない。彼はしばらくの間、久しぶりに見る自分の顔を色々な角度から観察していた。

次の日から彼は敵国人に混じって看守の仕事につき、彼と同国の囚人たちの監視を始めた。

看守は彼を含めて20人程度だった。作業服とマスクのせいでお互いが誰なのかはわからない。囚人たちは看守の中に彼らと同じ同国人の囚人が混じっているとは夢にも思っていないだろう。

マニュアルでは彼の仕事は囚人の監視であり、一日中立ちづくめであることを除けば彼がそれまでしていた作業員よりもよほど楽だった。食事も少しよくなった。パンとスープは相変わらずだったが、レタスやジャガイモなどの副菜がつくようになったのである。

ふと彼はその仕事を抵抗無く受け入れ始めている自分に気がついて当惑した。彼には怠惰な囚人を脅したり、反抗した囚人に暴力でいうことをきかせたり、場合によっては射殺する権限まで与えられていたが、自分は同国人である囚人に対して、果たして本当にそうすることができるのだろうか。

囚人の監視を続けるうちに、彼は無意識に自分を囚人の一人というよりは工場の一員と自覚し始めている自分に気がついて、考えさせられた。彼の銃口は本当なら誰に向けられるべきものなのか。例えば発車する列車に乗せて囚人たちを逃がしてやるべきなのだろうか。そんなことは可能だろうか。

しかしもしそんなことをすれば、彼は他の看守たちからたちまち射殺されてしまうだろう。そもそも彼は囚人なのか、工場側の人間なのか。自分はどちらの側に立てばいいのだろうか。

あれこれと考えてみたが、彼はこの矛盾を解決できなかった。自分は工場側の人間なのだと思います。いこめた方が楽だろうことは想像できたが、一端この矛盾に気がついてからはそれは常に彼の心の片隅に居座り続けており、じわじわと彼の精神を蝕んでいくのだった。

それから彼は表面上無難に看守の仕事の続けながらも、精神的には疲弊していく自分を感じていた。

そうしてまた数カ月が経過したある日、彼の独房に一人の男が訪れた。やはりマスクと作業服姿だったが、今度は彼が見たことのないオレンジ色のタブをつけている。男に案内されて彼はまた一階上の階に連れていかれた。

今度は独房よりもよほどましな、部屋と呼んでも差し支えがないようなところだった。ベッドの上にはまたマニュアルと、男と同じオレンジ色のタブが置いてあった。

彼はまた昇進したのだろうか、しかし思えば、彼が現場の作業員から看守に昇進したときでも、彼は自分が怠惰だと思われていたのかを心配したくらいであって、決して他の囚人と比べて勤勉だったわけではなかった。

今度の昇進にしてもそうだ。マニュアルに記載された言葉、勤勉に働けば報償が与えられるという記述、彼は自分が特別勤勉ではなかったことは自分でもわかっていた。いったい工場は何を基準にして勤勉か否かを決定しているのだろう。

今度の仕事場は作業場から見ていたあの管理室であった。彼の仕事はそこで工場の工程を点検することであった。管理室には長いコンソールが設置しており、彼のための席が用意されていた。

目の前にはいくつかのモニターが置かれ、作業場で黙々と働いている囚人たちの様子が映し出されていた。管理室には彼を含めて10人ほどが働いていた。今度は座ることもできる。仕事も楽だった。

いつも彼が入ってくる入り口の反対側にはもう一つのドアがあり、時折そこから銀色のタブを着けた男が出てくると彼らの仕事を見回っては帰って行った。おそらくはこの工場の幹部なのであろうと彼は想像した。

またある朝、彼が少し遅めにセンターに入ると、丁度他の者がモニターをつけているところだったのだが、彼が何気なくその画面を見ると、そこには広大な農場が映っていて大勢の小さな人影が見えた。立ち止まって見入ることもできなかつたので彼はすぐにその場を離れたが、あれは確かに看守と囚人たちだった。

多分Bトラップを降りて行った者たちなのだろう。彼はてっきりこの工場はその周囲を奥深い針葉樹の森に囲まれているものと思っていたが、すると近くに開墾された広い農地があるのだろうか。

工場のプラットホームの反対側に工場と隣接しているのかもしれない。おそらくそこでは工場働く人間のための食料を生産しているのだ。そういえば、少なくとも毎日やってくるあの貨物列車がここに食料を運んできたところは彼の知る限り見たことがなかった。この工場は自給自足しているのかもしれない。

それにしてもあれはどう見ても戸外だった。かいま見た人影は皆やはり彼と同じ格好をしていたが、戸外でガスマスクをしているのは符に落ちない。ここで生産される毒ガスはそれほど危険なものなのだろうか。それともこの格好には他に何か理由でもあるのだろうか。

毎日モニターを眺めているうちに、ふと彼は疑問に思った。

このように工場での地位を昇進してきた囚人は彼だけなのだろうか。これがマニュアルにいう報償であるならば、そして多分そのマニュアルは囚人たちに一律同じものが支給されているはずだと思うのだが、それなら他にも昇進してきた囚人がここにいるのではないだろうか。いや、自分でも怠惰だと思える彼自身ですら昇進してきたのである。むしろそう考えた方が自然なのではないだろうか。

すると彼が看守だった頃、彼は他の看守たちを当たり前のように敵国の人間だと思いこんでいたが、中には彼と同じように囚人から昇進してきた同国人がいたのかもしれない。そして今彼がいるこの管理室の中にも彼の同国人がいるのかもしれないではないか。

さらに押し進めて考えればこの管理室以下全ての人間が彼の同国人だということも絶対あり得ない話というわけではないだろう。この考えは無気力になってしまっていた彼を久しぶりに興奮させた。

彼は思わずあたりを見回した。周りでは他の者たちが黙々とモニターを見つめていてその表情は窺いしれない。

彼は思い切って隣の席の男をじっと見つめてみた。男はちらりはこちらを見たような気がしたが、そのまま何もなかったように自分のモニターを見続けている。

彼は落胆してまた前を向いた。

部屋に帰って彼は考えた。さっきの隣の男はやはり敵国人だったのだろうか。いや、彼の同国人でただ自分の境遇に満足していてマニュアル上の規則を守っているだけだったのかもしれない。それともあるいは逆に彼のことを敵国人だと思っていたのかもしれない。逆の立場に立って、彼がその男で、隣の者から同じようなことをされたとしたら彼ならばどうしただろうか。いきなりそんなことをされてこちらの準備が無い以上、おそらくはリスクを考えてやはり同じような反応をしたのではないだろうか。

彼の想像通りであるならばよほどうまく考えられた人事管理だ。囚人たちはよもや看守の中に彼らと同国人が混じっているとは気がついていない。囚人から看守に昇進した者の中には、今彼が思っていることに気づいた者もいるかもしれないが、しかしマスクと作業服のために誰が同国人だかわからない。そう考えれば戸外の農場で作業している者たちもマスクと作業服を着用している理由がわかる。

工場としてはお互いに誰が味方で誰が敵なのか、それを気づかれないようにすることが重要なのだ。そのために同一の作業着と顔を隠すガスマスクが必要なのだ。

彼と同じように昇進してきた同国人の囚人、その者たちもおそらくは彼と同じ疑いを抱いているはずだ。

それでも工場は稼動していく。管理室からから作業員まで囚人たちのみで作られたヒエラルヒー。もしそうであればこれほど効率的な強制労働はないだろう。

しかし、と彼はこうも考えた。敵はそのリスクを承知しているはずだ。仮に管理室以下の人間全てが彼の同国人であれば、例えば彼がマスクを脱ぎ捨て、祖国の者であることを高らかに宣言すれば、たちまち工場全体に反乱が起こるだろう。一方ではこんな不安定な危ういシステムもないわけだ。

敵がそのリスクを犯すわけがない。だとすればやはり工場の要所要所には敵方の人間を配置しているはずだろう。結局どちらにも考えられた。こうして彼は思考の袋小路に迷い込み、ますます疲労していくのだった。

やはり手近な者との意志の疎通が必要だ。しかし相手がもし敵であったらどうするのか。マニュアルではいかなる相手とも意志の疎通は厳禁されている。極刑ということも考えられる。果たしてそれは命の危険まで冒すに値することだろうか。

幾日も考えた末に彼は決心した。やはり誰かに意志の疎通を図ってみよう。もはや彼の精神はこれ以上今のこの疑心暗鬼の状況に耐えられそうもなかった。これ以上この疑問を持ち続けて生きていくよりは、どのような結果でもいい、答えを得たかった。

彼の予想では確かに工場内には作業員以外にも味方はいるはずなのだ。その希望に賭けてみよう。それら味方である彼の同国人は遅かれ早かれ彼と同じ疑問に行き着き、彼と同じ様に身動きが取れずに煩悶しているに違いないのだ。

彼の行動は、これら同国人たちの苦しみに対する最初にして最後の決定的なメッセージとなるだろう。そのイメージに彼は興奮し、工場に来て初めて精神の高揚を感じた。

その日、彼は朝から緊張していた。部屋にも管理室にも無用の紙や筆記具はなかったが、誰にどのような方法で意志を伝えるかはもう考えてある。



本当ならば相手は看守がいいだろうとは思った。第一段階での昇進である。彼の同国人が存在する可能性が一番高い。しかし管理室の人間が看守のいる作業場に降りてくることはあり得ないことだった。少なくとも彼の経験では一度もない。それに彼らは銃を持っている。失敗すれば射殺されかねない。

彼はその相手を管理室の隣席の男に決めていた。前に彼が男を凝視したとき、少なくとも男は彼のことを告発したりはしなかった。もし男が彼の敵であったならば、即刻工場側に彼の行為を通報したのではないか。男はやはり彼の味方であり、従順に規則に甘んじているのか、さもなければ彼と同じ考えに行き当たり、疑心暗鬼に捕らわれているだけなのではないだろうか。

彼がもっと積極的に意志の疎通を試みれば、彼が期待した返答が得られるかもしれない。彼は慎重に意志の疎通を図る手順を反芻した。まずは体ごと相手の方を向く。普通管理室の人間はそのような振る舞いはしないから、それだけで当然男の興味を引くはずだ。

その時点で男は彼が味方であるのかどうか、思案するのではないだろうか。それでも反応がなければ、彼は相手の肩を叩き、その左手を取って手のひらに指で彼の祖国の名を書くのだ。

もし相手が味方であるならば、それで彼の言わんとすることは伝わるはずだった。仮に相手が敵であれば、ほぼ確実に彼は処罰されるだろう。味方だとしても相手が現状にあまんじているのならば、工場の上層部に通報されるかもしれない。それとも相手は彼を見逃してくれるのだろうか。

彼は期待と不安の入り混じった気持ちで自分の席についた。隣の男は既に席についていた。彼は自分の動悸が早くなっていくのを感じていた。モニターを眺めてはいるが映像は目に入らない。呼吸が急速に荒くなっていくのが自分でも分かったが、このときばかりはガスマスクのせいでそれが他人には分からないことを感謝した。

小一時間もたった頃、彼は意を決して男の方を向いた。しかし、数秒が経過しても男の様子に変化はなかった。彼の動作に気がついていないはずはない。彼はしばらく躊躇していたが、意を決してついに男の肩を叩いた。しかし相手は何の反応も示さなかった。

彼の手は小刻みに震えていた。少なくとも拒否はされていない、彼は無理にもそう考えた。彼は相手の腕を取ろうと手をのばした。その瞬間誰かが後ろから彼の腕を掴まえた。驚愕して振り向くと、背後には一人の男が立っていた。その左腕の腕章には銀色のタブが光っていた。

彼はうなだれて男の後に続いた。ついに処罰が下されるのだ。彼が腕を掴まれた時、隣席の男は彼を助けようともせず、まるで何事もなかったかのように微動だにしなかった。あの男は敵だったのだろうか。それとも規則にあまんじている囚人だったのだろうか。彼はせめて最後にそれを知りたかった。しかし今となってはそれも叶わない。

彼はまた一階上の通路に導かれた。もうだいぶん工場の上部にたどり着いているはずだ。その通路には三つの部屋があり、それぞれのドアには全て副工場長と記されたプレートがついていた。彼はその一室に通された。ここで尋問されるのだろうか。

しかし意外にも男は彼を置き去りにして去っていった。後ろを振り向くとベッドの上にはマニュアルと銀色のタブが置いてあった。予想外の展開だった。彼は副工場長に昇進したのだ。

この事実は彼を驚かせ、また当惑させられた。マニュアルにはやはり報償と処罰の記載がある。彼は再考した。するとこの工場という報償とは単純に昇進のことをいうのか。彼は今や副工場長だった。上にはもはや工場長しかいないはずだ。この上の報償とはさらなる昇進、つまりは工場長となる可能性もあるのだろうか。いや、それはあまりにも飛躍した考え方だろう。仮に副工場長以下が全て囚人たちで占められていたとしても、それを統括する指揮官は敵国の者と考えた方が自然だ。

だがもし工場の規則に忠誠を誓い敵国の信頼を勝ち得た囚人ならばどうだろう。それでも工場長にはなれないものだろうか。

工場全体を囚人たちのみで組織し巧妙に自主運営させるという発想、もしそれが本当ならば感嘆に値する。今や彼は副工場長である。副工場長は三人。単純に考えても工場の三分の一は彼の支配下にあるのだ。たった今反乱を起こすことも可能だろう。

だがそこで彼は自分を戒めた。前にも考えたように、そういう考えは楽観的に過ぎないか。それはこの過酷で誰とも会話すらあり得ないという工場内の状況の中で、彼の希望を持ちたいという願望が生み出した妄想なのかもしれない。

結局やはり昇進してきた囚人は彼一人なのかもしれないではないか。彼がここまで昇進してきたのは幸運だったと考えるべきなのだろう。最もそれはこの工場が彼の祖国を攻撃する毒ガスを製造しているという事実により深く関与している罪悪感を伴うものではあったが。

彼は敵にその忠誠を認められた囚人ということなのか。そうであればそれはむしろ屈辱的なことではないだろうか。

いや、それ以前にまだ考えるべきことはあった。彼はいつのまにかこの工場の者を自然と敵国人と同国人のみで構成されていると考えていたが、その根拠はどこにあるのだ。例えば第三国の者や、もしかすると刑務所に収容されていた犯罪者たちもいるのかもしれないではないか。

もしそうならば、彼が工場に反旗を翻したとして、それに付き合う義理のある者はいったいどのくらいいるのだ。

彼の思考は希望と落胆の間を揺れ動き、もう考えること自体が苦痛になって来た。彼は副工場長としての仕事に専念し、次第に考える事をやめていった。

仕事は単調だった。毎日定時に管理室を巡回するほかは自分の部屋にある数台のモニターを切り替えながら工場内の治安を確認していけばよかった。彼は無意識の内に他の者と意志の疎通を図ろうとしている者を探そうとしていたが、それが期待感によるものなのか、業務上の義務感によるものなのか、もう自分でもわからなくなっていた。

時折は他の二人の副工場長と通路ですれ違った。彼らはやはり腕章に銀色のタブを着けており、その腕章の番号は1と2だった。彼はもう気にもとめなかった。通路の突き当たりには工場長と記されたドアがあったが、そのドアが開いたことはなかった。彼はそのドアにも関心を示さなかった。

ある日彼の部屋のドアがロックされた。彼は自分の椅子からのろのろと立ち上がるとドアを開けた。そこには見慣れた作業服とマスクの男が立っていた。ただしその腕章のタブは金色だった。ついに工場長がやって来たのだ。しかしだからどうだというのだ。彼にはもう何の感情もわかなかった。

彼は通路の奥、工場長と記されたドアの前に連れて行かれた。工場長が壁のボタンを押すと、ドアは横にスライドして開いた。エレベーターだった。彼らが乗り込むとエレベーターは上昇を始めた。小さな窓から外が見えた。エレベーターは工場の建物を突き抜けて、鉄の塔を登り始めた。高い。

到着した先が工場長室だった。かなり広い。どうやら工場長室は工場の屋根を突き抜けて建てられた鉄塔の上に管制塔のように建築されているらしかった。周囲の壁は低く、その上部は全てガラス窓になっている。そして部屋の中央部には固定式の椅子があり、その前に小さなコンソールが据え付けられていた。そこには時計といくつかのボタンが配置されていた。

工場長はしばらくあたりを見回していた。ガスマスク越しでその表情はわからなかったが、彼には何か疲れているように言えた。それから工場長は彼の方に向き直り、255と書かれた自分の腕章の金色のタブを外した。そして無造作にそのタブを彼に突き出した。

彼は何も考えることなくそれを受け取った。すると工場長だった男はまたエレベーターに乗って去って行った。彼は何の感慨も無くただ機械的にその金色のタブを見つめていた。彼はついに工場長になったのだ。

彼は窓から外を眺めた。久しぶりに霧が晴れていた。工場のプラットフォームの反対側になるのだろう、眼下には森を切り開いて開墾された大農場が見えた。小さく豆粒くらいの大きさに何人もの人影が見えた。管理室でかいま見た作業員と看守たちなのであろう。やはり工場は農場も持っていたのだ。

森はその先しばらく続いてから突然途絶え、その先には樹木一本も見えない果てしない荒野が広がっていた。彼は工場から延びるいつもの貨物列車の線路を目で追った。線路は緩やかなカーブを描いてその荒野に続いていた。そしてはるか遠く地平線の近くで、また工場に向かって戻って来ていた。

軌道は完全な円を描いており、その途中で停車できる設備はなかった。列車は工場を出発し、一日かけてそのまま再び工場に戻って来ているだけだったのだ。

彼は何度となくその軌道を目で追いながら困惑した様子に見えた。それから彼は集中力の欠けた頭でぼんやりと考えた。結局彼らは一体何をしているのだろう。毒ガスは結局どこにも送られてはいなかったのだ。彼らが毒ガスを詰め込んだ鉄球は工場を出発した後、別にどこにそれを運んでいるわけでもなく、ただそのまま、また工場へと送り返されているだけなのだ。

いや、こうなるとそもそもその中身が果たして本当に毒ガスなのかどうかすら疑わしい。ガスマスクの着用と作業の様子から毒ガスの製造を連想するのは当然ではあつただろうが、永遠に使われないものであれば中身はなんでもいいではないか。

考えてみればマニュアルにはただそれぞれの者に対する作業手順だけが記載されているだけで、製造するのが毒ガスだとは一言も書いてはなかった。それに常にガスマスクを着用させるほどの危険があるのならば、通路や作業所の出入口に二重隔壁のひとつも存在しないのはおかしくはないだろうか。一体彼らは本当は何を作っていたのだろう。

いやもっと正確に言えば、彼らは何かを作っていたのだろうか。彼はふいに強い疲労感を覚えたが、ある程度、このような結末を予想していた自分にも気がついていた。

それから彼はマニュアルを開いた。そこには報償や処罰の記載はなかった。彼はついに自由の身になったのだ。しかしもはや彼にはその事実も無意味にしか思えなかった。

マニュアルによれば工場長としての業務はごく単純なものだった。ただ時間に合わせて、起床、始業、終業の知らせを告げるボタンを押すだけである。工場に対しての指示がどこから為されるのか、それはどこにも載っていなかった。部屋には無線の機器らしいものも見あたらなかった。工場はそれ自体が単独で孤立していたのだ。

それからマニュアルには、彼の工場長としての任期が六ヶ月であること、工場の総員は256人であること、任期が満了した際は自分の一つ上の番号の者を昇進させ、番号256の者は番号1の者を昇進させること、そのために生じた下層の欠員については同様の手順でそのまた下層の者を昇進させること、各階層ごとにそれは行われること、そして任期を終えた工場長は列車に乗ること、と記されていた。

彼は自分の番号を確認した。番号256。それは彼がこの工場最後の工場長であることを示していた。するとやはりこの工場の間人は全て囚人であつたのだ。そして全ての者が一度は工場長まで昇進した経験を持っていたのだ。

彼がこのままマニュアルに従うなら、このまま工場長として働き、その任期を終えた後は、彼は列車に乗り、翌日また工場に戻って来て振り出しに戻り、最下層の作業員からやり直すのだ。永遠にその繰り返しが続くのだ。そうして彼を除く工場の全員がその事実を知っていたのだ。

それでは敵はどこにいるのか。そもそも最初から敵などいはいしなかったのではないだろうか。彼は再度自分の記憶の糸を辿った。敵国との交戦状態、捕虜となった自分、しかしそれは思い返せば漠然としたそういう観念だけで成り立っており、具体的な過去の事実は少しも脳裏に浮かばなかった。果たして本当に敵だの捕虜だのといったものがあつたのだろうか。

彼が今見た列車の円形軌道とマニュアルに記載された工場の昇進の構造からすれば、そもそも彼はこの工場からやってきたことになるのではないか。それなら彼は何者なのだろう。いや彼だけでなくこの工場の者全員は一体全体何者で、そもそもの初めはどこからやってきたのだろう。そしてこの工場は誰が何のために造つたのだろうか。

その時ふいに、全く突然に、彼は思い出した。彼はかつてここにいた事があつた。彼は今と同じようにこの部屋から窓の外を眺め、モニターを観察し、工場を管理していた。そして数ヶ月の後、彼は副工場長の一人を呼び、彼が今日されたのと同じように自分の金色のタブをはずし、相手にそれを手渡したのではなかったか。そして彼はエレベーターを下り、列車に乗ってこの工場を去っていったのではなかったか。

彼は何故今までそれを思い出せなかったのであろう。なぜその度にひどい吐き気と頭痛に襲われていたのだろうか。やはり無意識にそのことを思い出すのを避けていたのだろうか。何故なのか、そして何故今になってそのことを思い出さなければならなかったのか。蘇つた記憶は今となつてはむしろ一層彼を憂鬱にするだけであつた。結局彼は何者だつたのだろうか。自分は何歳なのか、それすら彼には思い出せなかった。



どこで生まれ、どこで育ったのか。どうしてここにいるのだろうか。よく考えてみれば彼には子供の時の記憶の断片ですら思い出せないのだった。荒涼とした大地を眺めながら、彼は頬が濡れているのを感じ、自分が泣いていることに気がついた。自分はなぜ泣いているのだろうか、彼にはそれも分からなかった。

今彼に金色のタブを渡して去っていった工場長、彼もまた同じようにその記憶を失っていくのだろうか。そしてまた列車に乗って荒野を一周し、明日の朝、何の記憶も無いままに最初の独房に案内されるのだろうか。彼とどこが違うというのか。そしてこの工場にいる看守も作業員も、一体彼とどこが違うというのか。皆同じだ。同じ事なのだ。

その一人一人、違うところなど、ここではありはしなかったのだ。

今なら、と彼は考えた。自由の身となり、全ての権限を握った今なら、自分はこの悪夢のような堂々巡りを止めることができる。

彼はその夜眠らなかった。夜通し微動だにせず工場長の椅子に座り、前方を見つめて何事か考えつづけていた。それから次第に空が白み始め、やがてコンソールの時計が起床の時間を指した。

彼はしばらくためらっていた。

それからゆっくりとその手を伸ばし、起床を告げるボタンを押した。